

奈良・山田寺跡



(吉野山)

検出された遺構は、山田寺の造営に当たって行われた大規模な整地土の上と整

った。今回の第七次調査は、南門の位置や構造、南門の南の利用状況、寺域の規模などの解明を目的とし、約一一五〇㎡の面積を対象として実施した。

- 1 所在地 奈良県桜井市山田
- 2 調査期間 一九八九年(平一)一〇月～一九九〇年二月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 代表 牛川喜幸
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 飛鳥～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

山田寺跡では、一九七六年以来六次に及ぶ調査が実施され、伽藍

の配置や塔・金堂・講堂・中門・回廊の規模・構造などが明らかと

なった。今回の第七次調査

は、南門の位置や構造、南

門の南の利用状況、寺域の

規模などの解明を目的とし、

約一一五〇㎡の面積を対象

として実施した。

検出された遺構は、山田

寺の造営に当たって行われ

た大規模な整地土の上と整

地土の下で検出した遺構に大別される。整地土上で検出した遺構は、南門に関わる時期に属するもので、整地土下で検出した遺構は、山田寺造営前の時期のものと考えられる。

南門に関わる時期に属する遺構はさらに南門の造営前後で細別される。

まず南門造営前の遺構には、東西掘立柱塀四条SA六〇〇・六一五・六二一・六二四(SA六〇〇は後の南門棟柱筋に検出した南門造営前における寺域の南を閉塞する施設、柱間寸法は確定し難いが、伽藍中軸線上の間は他よりも広く柱間をとっており、通路の役割を果たしていたものと推定される)、東西溝SD六〇一・六〇九(ともに幅〇・六m、深さ五二〇cmで、西流する)などがある。

また南門造営以後の遺構には、南門SB〇一(桁行三間・梁行二間の東西棟礎石建物で、桁行は一〇尺等間、梁行は九尺等間、なお棟通りの三間全てに扉が設けられていた)、南門に取り付く掘立柱東西塀二条SA六三〇・六三一(柱間寸法は八尺等間、のち塀が廃され築地に改造された可能性がある)、東西溝SD六二五(当初は幅二・五×三・七五m、深さ一・〇mの素掘の溝SD六二五Aであったが、奈良時代になり南門前面の基壇幅に合わせて南北両岸を石で護岸した溝SD六二五Bとなる)と、これに架かる橋の橋脚SX六二一・六二三(南門の中央柱間に合わせて架けられる)、参道二条SF六一〇・六四〇(SF六一〇は南方から南門に至る南北道路で、路面幅八・六m、東西に素掘の側溝SD六一一・六一二を伴う)、

SX六〇五（内部に一・二mの間隔で東西に並ぶ二個の柱抜取穴を有する穴で、幢幡の竿を立てた遺構と考えられる）などがある。

一方南門南の参道上で行った下層遺構確認のための調査では、整地土下で旧流路SD六一九（丘陵裾部に沿った旧谷地形の流路で、北岸のみを検出するに留まったが、幅5m以上、北肩からの深さ約一・六m）と東西に並ぶ柱穴三個SX六二〇を検出した。

木簡は整地土下で検出した旧流路SD六一九から五一点（うち削屑四四点）が出土した。SD六一九は深さ約一・六mあるが、その上方一・二mは山田寺造営に関わる整地土によって埋められ、下方〇・四mに堆積層が二層残り、木簡は両層から出土した。SD六一九からは木簡の他に飛鳥I（七世紀前半）の土器や木製品・獣骨や多量の木片が出土した。

なお東西溝SD六二五Bからは底部外面に「山田寺」と墨書した土器（奈良時代後半の土師器皿）が一点出土しており、本寺跡が山田寺であることを示す文字資料として注目される。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・見悪悪

・身身

□□□□

(116)×39×3 081

(2) ・耳

□□

(49)×(23)×2 081

(3)

〔城城城力〕
□□□□

091

(4)

〔城城力〕
□□城城城

091

(5)

□城□

091

(6)

〔城力〕〔城力〕
□城□

091

(7)

□□（天地逆）
城城城□

091

(8)

〔城力〕
□□

091

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報20』（一九九〇年）

（橋本義則）